

シーズ発掘試験で知的財産創出へ

キーワード：シーズ発掘・実用化支援・知的創造サイクル

本事例の関係者

徳島大学
教員
知的財産本部

文部科学省産学官連携
コーディネーター

知的創造サイクルを回す新たな取組へ

【要約】

知的財産創出の協議・検討は徳島大学では「知的創造サイクル推進検討委員会」の場で行っているが、発明届の受理から特許出願が決まると、出願作業やTLOによる狭義の技術移転に焦点が移り、コーディネーターの実用化に向けての支援活動は疎かになりがちであった。

そこで、教員の研究開発シーズを実用化へ支援するに際し、試験研究費獲得の手段として、コーディネーター等はシーズ発掘試験の活用を推進してきた。

シーズ発掘試験はその応募申請のコンパクトさから教員が新たな研究開発を進める上で大いに役立っている。1年間の試験研究で得た成果を実用化や、新たな研究開発につなぐコーディネート活動への要望が年毎に研究者から強くなっていることから、シーズ発掘から実用化へのコーディネートシステムの構築・定着に向けた取組みを始めている。

【きっかけ】

シーズ発掘試験は平成17年にシーズ育成試験でスタートし、平成18年に衣替えされて現在に至っている。当事業はコーディネーター等が①有望な研究開発シーズを発掘して ②実用化に向けた支援を行ったり、それを促す活動を推進する目的で ③簡潔な申請書で試験研究資金を獲得する仕組みを ④コーディネーターから教員に提案できるシステムである。

コーディネーターは、大学等の関係者と協力して、知的財産創出の誘導役となり、大学技術の知的財産化に寄与すると共に新技術での社会貢献を促進するのに有用な制度と認識し、活用をはかってきた。

【段取り・プロセス】

応募実績は、最初の平成17年度は30件の応募をまとめ3件の採択を得るに止まりコーディネーター、大学全体ともに低調であった。せっかくの制度を活用するため応募増加に向け有望なシーズの収集をはかるべく、毎年9月に工学部で開催されるエンジニアリングフェスティバルの場を活用した教員への調査・PRの実施や、過去のシーズ集から研究者情報を得るなどの対応を行ってきた。

シーズ発掘活動の進展に合わせて、平成18年10月にJSTイノベーションサテライト徳島（以下、サテライト徳島という）が徳島県、大学等の尽力で徳島大学知的財産本部内に設置された。サテライト徳島の設置に動いた知的財産本部スタッフによるシーズ発掘試験応募の推進や、サテライト徳島のスタッフによる事業説明等が相俟って、平成19年から応募件数の急増につながってきた。

【成果・結果や活動後の変化】

大学の使命である社会貢献として、地域・社会との協働や研究開発を進め、シーズの育成、知的財産の創出から知的創造サイクルを回す活動に取り組んでいる。シーズ発掘試験の推進により、平成17年からの応募累計は339件に上り、採択は67件に上る。コーディネーター発掘案件からは論文発表はもとより、地域資源の紫外線LEDを活用した殺菌装置開発に向け特許出願から研究プロジェクトが立ち上がりJST育成研究に進むなど、その支援の成果が得られている。

シーズ発掘試験の目的には成果の実用化があるが、その過程ではまず知的財産化の検討を行い、併せて技術移転活動の過程で教員との連携が実用化に向け進むと考えており、シーズ育成活動の基本として取り組んでいる。

JSTイノベーション サテライト徳島： シーズ発掘試験の 受理/採択件数

H19年
受理 254件/
採択 48件

H20年
受理 263件/
採択 56件
(内B型 12件 / 1件)

シーズ発掘試験の 増加

H18年
申請 56件
(採択 13件)

H19年
申請 124件
(採択 22件)

H20年
申請 129件
(採択 29件)

成功の事例

まずはシーズ発掘試験の推進から

●試験応募に向け新たなシーズ発掘手段を活用した

学内ネットワークが拡がると教員経由、研究者総覧データベース、既存の刊行物等で学内シーズを確認する作業が主体になり、新たなヒアリングの機会が減ってきていた。シーズ集の見直しや工学部エンジニアリングフェスティバル等の催しを利用した面談で教員情報を拡げることで新たなシーズ発掘から応募増に繋がってきた。教員の競争的資金への応募情報等のデータベースが知的財産本部に構築されており、各種検討に利用する態勢が整っている事は支援材料になっている。

●案件フォローが次につながる

研究開発試験が成果につながるためには採択されるのが一番であるが、知的財産権の創出に繋ぐために、また、来年の申請に繋ぐためには採否を問わず実用化へのフォローが有効と考えている。また特許管理室スタッフは過去のシーズ発掘試験概要から新規性を中心に見直しを進めており、有機的な活用を目指している。

●受託研究として研究資金、間接経費の増収につながった

平成20年度のシーズ発掘試験では、知的財産本部コーディネーターの積極的な活動から、29件の採択で60百万円の受託研究獲得につながる成果を上げることができ、大学に大きなメリットがあると評価が得られている。

知的財産



JST事業説明会

失敗の事例

知的財産創出に向けて

●イノベーション創出の意識を前面に出し活動が出来ているか

シーズ発掘試験の目的は研究シーズの実用化を促し、イノベーションの創出につなげることにありと理解はしている。しかし、知的財産化につながる相談からヒアリング等の一連の業務は特許管理室が担当していることもあり、コーディネーターは年数回のヒアリングで研究開発の進捗を確認するに止まり、次の研究開発への詰め・促進が形式的で、実用化への期待や思いが教員に伝わっているか反省している。継続した支援のあり方を知的財産本部全体の実務を通して構築したいと考えている。

●特許管理室と連携出来ているか

ヒアリング時に受ける教員からの特許相談等は概要説明程度で済ませ、担当者との連携したヒアリングは特定プロジェクト案件に止まっていた。今後知的創造サイクルの回転を意識して、教員との面談機会を増やすことが知的財産の創出によりつながると考えており、実施に向け実務態勢作りを進めたい。

成功と失敗の 分かれ道

シーズ指向のコーディネート活動では企業と、シーズ指向の活動に於いては教員との接点を多くし信頼感を醸成していきたい。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

知的創造サイクルを一丸となって回す

シーズ発掘試験は3月に入ってから応募が多く締め切りまで処理が輻輳している。平成21年は新たに1名コーディネーターが増員され、また若手職員も新たにヒアリングを行う態勢が採られ、シーズ発掘試験の推進や人材育成への大学の意気込みを感じている。我々の一丸となった活動がより一層大学の持つポテンシャルやマネジメント力の引き出しにつながるように活動を進めていきたい。

大学シーズの実用化に向けたコーディネート活動の取組みにより、地域・社会の活性化につながる技術が創出されると期待される(大学の社会貢献)。これがイノベーションの創出につながる仕組みづくりの核となり、産学官で必要な研究資金、技術等を連結させるコーディネート活動ができればと考えている。

学内においては知的創造サイクルを本部スタッフと一丸となって回し、社会の要請、産業界の期待に応えることが社会との信頼構築につながると考えている。

そして、教員との信頼の醸成はその基本にあると考えている。

☆コーディネーターの一言

実用化に向け、知的創造サイクルを速く大きく回す、という基本を如何に実践・推進していくか各界から期待されており、コーディネーター活動で実践して行きたい。